村田良成さん

○被災された記憶

生まれた所は長崎県の稲佐山ロープウェイがある淵神社の近くで静かでいい所でした。５歳のことは良く覚えています。それは私にとってあまりにも衝撃だったからです。

１９４５年８月９日の出来事、５歳１１か月、１．８㎞の所で被爆し、一瞬にしてすべてを失いました。

私はいつものように、母と二人で家にいた時に空襲警報が発令され、急遽防空壕に行く準備をしていたところ、突然警報が解除され、家でゆっくりしていました。そしたら、また「敵機２機、島原上空を通過」という警報があり、玄関口で着替えをしていました。その時突然「ピカッ」と光が走りました。よく皆さんが「ドーン」と響いたと話されるのを聞くのですが、私はいっさい聞いていません。多分その時私は気絶していたのだと思います。気が付くと部屋の奥の方に飛ばされて、何も見えず、なにもわかりませんでした。気絶していたのか光で目が見えなくなっていたのか、ただ真っ黒だという記憶しかありません。

暫くすると、母が叫ぶ声がして母に飛びついたのですが、母の顔を見ますと額から血を流して今まで見たことがない顔をしていました。人間なのかなぁと言う顔でした。母の傷は生涯消えることはありませんでした。女性にとって額の傷というのは想像を絶するものだと思います。

防空壕に行く用意をして玄関に行くとつぶれていて這い出すこともできません。母と私の力では瓦礫をどうすることもできません。道行く人に「助けて下さい。助けて下さい。」とお願いしましたら、親切な男の人が２人瓦礫を取り除いて中から引っ張り出してくれました。私と母は助かり、初めて人に感謝する気持ちというものを持ちました。

５歳の記憶なので少し違う所もありますが、防空壕から出ますと真っ赤に燃える街並み、自分の家がどうなっているんだろうと心配になったがどうすることも出来ませんでした。皆さんも想像してください。自分の家が燃えている光景、どんな気持ちになるか。これは経験した事のある人しかわからないものだと思います。私はこれを５歳で味わい、原爆・戦争というのは、非常に怖いもんだなぁと感じました。

本当に家が燃えてしまったのかを検証してみたのですが、原爆が落ちた時には、家はあったんですけど、防空壕から出たときは何もなくなっていました。

父は会社から戻り、探してくれていました。防空壕で再会することが出来、本当にホッとしました。父は無傷で無事でした。不安だったので父と会えたのが、こんなに嬉しいと思ったことはありませんでした。今まで父は怖い存在でしたが、本当に頼りになる人なのだと感じました。

私達は帰る場所、家がありませんでした。長崎に父の兄姉がいましたが、連絡を取る事が出来ず孤独でした。そこで母の故郷、島原半島の「加津佐」に移動することを決め、てくてくと親子３人で歩きました。乗り物も何も動いていないので、父の自転車に乗ったり、歩いたりして辛い道中でした。爆心地の中心を通らなければならず、否応なしに色んな光景を見なければならず、二度と見たくない悲惨な光景を目にしながら、長崎をあとにしました。

歩いていたので、目的地まで約８０㎞ですから、野宿をしました。突然あたりが明るくなって飛行機の音がし、何かなと思ったら焼夷弾でした。沢山の経験をしながら、道を歩いていると農家の人がおにぎりをくれたりなど、人の親切を頂きながら歩きました。人の親切がどれだけ大切か痛感しました。

その後の生活は当時栄養失調なのか、原爆症なのか分かりませんが、中学生ぐらいまで体が弱くて、年中下痢の繰り返し、学校も年中お休みしている状態でした。トイレで力むと腸が出てしまい、自分ではどうしようもないので母に押し込んでもらったりしていました。母は看護婦をしていたので、いろんなことが出来る人でラッキーでした。

皆さんにも想像して頂きたいが、あの光景は二度と見たくない。人にも見せたくないのが私の心情です。原爆で得た大きな教訓でした。

○幼いころの生活

野宿をして、焼夷弾の落ちた記憶と「加津佐」の５ｋｍ手前で、母が動けなくなってしまい、近所の人にリヤカーを借りてひきながら向かいましたが、どれだけの時間がかかったのか記憶にありません。ほぼ６歳に近かったですが、原爆が落ちる前の記憶はほとんどなく、それだけこのことは強烈でした。

住むところもない、食べるものもない、いろんなことを味わいました。どなたでも経験はあると思いますが、平々凡々と生きている時の記憶はないけれど、一瞬のうちに自分の人生が変わるような事は記憶に残るのだと思います。自分の一生が変わる瞬間なんですよね。そういう意味では、その時の事はほとんど覚えています。

ただ私は当日長崎を出たので、その後の長崎のことはまったくわかりません。

○子供たちに伝えたい事

戦争をするのも人、止めるのも人だという事を子供たちに知って欲しい。その為には命や家族の絆を大切にすること。今、子供たち自身が何が出来るのだろうと思った時に一番できるのは、勉強、スポーツ、友だちです。友だちと仲良く、助け合いの心を築いて欲しい。そうしたら、戦争はなくなると思います。